リンゴを求めて

みゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リンゴを求めて

【Ｎコード】
Ｎ５７３５Ｘ

【作者名】
みゅう

【あらすじ】
それは「リンゴが食べたい」という一言から始まった旅。【主人公補正】持ちの女竜騎士に、肉体派のエルフ娘、怪しい猫耳ハンター娘に、【悪運】持ちの料理人な主人公。世界情勢何のその自由気ままな旅をするも、逸般人な４人は奇縁を呼び寄せてしまう。包丁とフライパンを手にした主人公が、ヒロインたちによる【暗黒料理】の魔の手から人々の生命を守るお話……かもしれない。

始まりは【暗黒料理】（前書き）

ネギま二次創作をしている者ですが、完全オリジナルをやってみたくて投稿しました。異世界ファンタジーです。できれば週1か月3回ほどの更新ペースで頑張りたいです。

始まりは【暗黒料理】

幸運と引き換えに運命を歪めてしまう厄介な俺の固有スキル【悪運】。

そんなものにも今では感謝している。

今になってようやく思い出せるようになったあの日の出来事から俺の旅路をここに綴ろう――――

「喰うかい？」

そう言って紅い髪の小柄な少女に差し出されたのは、枝に刺さったネズミの丸焼き“らしき”物体。“らしき”という言葉は決して「ネズミ」の方に掛っているわけではない。目の前の悲惨な物体がネズミかどうかなどは些細な問題だ。

これは「丸焼き」なのか？

丸焼きというにはあまりにも……黒い。黒過ぎる。ただ焦げているというだけではない。気のせいか周りに黒い煙、むしろ食材となった命の怨差が纏わり憑いている気がする。そりゃ恨むだろうな。

死んだ挙句にゲテモノ料理と化しちゃ報われない。自然の理、命の冒涜だ。だがこれが仮にゲボマズ料理だとしても漢としては美少女3人の手料理を口にしないわけはいかない。

そんな漢としての矜持と、視界に映る惨事の間で葛藤していたが、当の彼女たちは平然と談笑しながら食べており、銀髪の少女と俺にソレを差し出した紅い髪の少女は既に二匹目に齧り付いている。

意外と大丈夫なのかもしれないな。

そう判断してまずは一口、キャラメル一個分くらいの量を口に含んだ。本当に気持ち程度だ。この量なら大丈夫だと判断した俺の見込みは甘かった。クイニーアマンにアカシアの蜂蜜を瓶ごとぶっ掛けるよりも甘すぎた。

そいつは只のゲテモノ料理なんてものじゃない。

黒炭のようになるまで焦げた苦味、抜けてない血と取れない獣臭さ、明らかに用途を間違っている香草のブレンド、表面の焦げたガチガチ感と、半生ですらなく、生々なままの内側の肉の奏でる不協和音――――解析するほどに精神崩壊を起こしそうなその料理とも呼べない“何か”は　全ての点において破滅的で壊滅的だった。

即座に吐き出せばよかったものの、あまりのショックで吐き出すことはおろか飲みこむことすらできず、気を失う瞬間に目を強制的に覚まされるほどの不味さ。

ＨＰバーが目に俺の眼に見えるのならば今頃赤く点滅しながら１という絶望的な数値を叩き出しているだろう。しかも毒でも麻痺状態でもなさそうな生殺しである。

文字どおり死にかけの魚のような目で俺は、毒殺を謀ろうとした張本人たちの方を見る。

信じられない。

何で彼女たちはそれを平然と食べていられる？　そしてあの金髪は今なんて言った？

「いつもより良くできてるね」……だと。ふざけるな。

この娘等、正気じゃない。一体どういう味覚と食生活をして来ているんだ。

そんなことを考えながら何度もＫＯと覚醒のループを繰り返し、とうとう俺の意識は――――完全に墜ちた。

そして後に、この日に人生を狂わせた元凶を俺は知ることになる。

固有スキル【暗黒料理】
：どのような食材も調理すると一定の確率で【暗黒料理】が完成する。なおこのスキルによって作成された【暗黒料理】は麻痺・猛毒・火傷・暗闇をはじめとする各種パラメータ異常、ＨＰダメージ、ＭＰダメージ、ステータス増減などを引き起こす。

まさに呪いとも天災とも呼べる凶悪スキルを彼女たち３人全員が取得しているという悪夢のような状態だったのだ。そして俺が食したのは

≪暗黒料理≫ヨーグリアネズミの冥界焼き
：ＨＰ小回復。耐毒性が低い者に対しＨＰダメージと、稀に記憶障害をもたらす。

そうなのだ。俺はこの時に多くの記憶を失ってしまった。あまりにも下らない事の顛末。だがそのおかげで今の俺は新しい仲間たちと新しい人生を歩むことができるようになった。

【主人公補正】持ちの我らが姫の竜騎士をリーダーに、流暢な肉体言語を操るエルフ娘と、異なる理を持つ猫耳ハンター娘という攻撃力過多な美少女３人のパーティ。

そこに旅の料理人として加わることで“新しい俺”の人生は再スタートした。

始まりは【暗黒料理】（後書き）

初めての完全オリジナルということで、原作のネームバリューなしでの評価はどんなものだろうかとドキドキの私です。本業絵師ですので挿絵をどんどん入れていこうと思います。最初なので短めですが感想お待ちしてます。次はその分早めに土か日曜更新を目指します。

第2話　加害者たちの焦想　（前書き）

更新遅れました。今度は主人公以外からの視点。まだ主人公の物語は始まってません。

第2話　加害者たちの焦想

“彼”が眠ってから３０分。完全に日が暮れた森の中、少し開けた土地で火の番をしながら、横に並んだ3人の少女は今後について話し合っていた。

「よっぽど疲れとったんねぇ」

銀髪の彼女は体育座りの姿勢から上半身だけ振り返って、丸太の上で横にされている“彼”に毛布をかけ直す。

「何、ミイは“そういうの”が好みなの？　意外ね」

「な、なんば、エリスは言いよっと！　勘違いせんでよアンナ。違うけんね。さっきのに深い意味はなかとよ」

ミイと呼ばれた少女は必死に手を振って否定する。雪原のように白く澄んだ肌が、若干紅くなっているように見えるのは、闇夜に揺らめく焚火のせいだけではないだろう。

「そういうところがイチイチ可愛いのよ。からかってみただけよ。ゴメン」

エリスと呼ばれた金髪の少女は意地悪く笑う。遊ばれていたとわかってはいても納得できていないであろうミイは目を細めて頬を膨らます素振りをする。

「それにしても完全に眠っちまってるなぁ。飯喰ってから色々聞こうと思ってたのに。結局さ、まだ名前さえも聞けてないや。でもど

う見ても、この兄ちゃんの魔人族で訳ありだよな」

楊枝を食みながら赤髪の少女は疑問を呈する。成り行きでどうにかしようとしていたらしい彼女にとって、本人との意思疎通ができない現状が多少苛立たしいようだ。

「逃げて来たとかじゃなさそうよ。彼、少し汚れているけどスーツも靴も上物よ。どこかの貴族かもしれないわ。それにアンナは彼の左腕を見た？」

エリスに言われて、赤髪の少女――アンナは彼の左腕を確認する。

「多分これ、ブレスレット式の時計か？　すごいな。こんな小さな時計はアタシ初めて見た。これマヤルーサの時計塔より凄いんじゃねぇ？」

「こらっ！　止めなさい。ゼンマイ仕掛けは壊れやすいのよ。そんな風に突いて壊したらどうするのよ。これだけのもの、多分弁償なんてできないわよ。アンナの村だけじゃなくて私の家も搾り取られるかもしれないわ」

「家出中なのに心配するんだな」

「当然でしょ。だって私が帰る所はそこしかないもの。今は居場所がないだけで……」

「な、何かごめんな。エリス」

気まずい沈黙が2人の間に流れる。火に寄って来る虫の羽音と、薪木のはじける小さな音だけが流れる。そんな中、後ろでミイが彼に向って何かをしている音に2人は気がついた。

毛布の剥がされる音、まるでネクタイを外されて服を脱がされているようなシーンを想像してしまうような衣類の擦れる生々しい音、そして先ほどより少しだけ不規則に乱れる“彼”の呼吸。

――――こんな気まずい空気の中で、ミイは一体何を!?

同じ考えに至り、固唾を呑む2人。アイコンタクトを取ると同時に振り返る。

振り返ればそこには予想通りの風景。

彼はネクタイを外され、無防備にも白いシャツから少し鍛えられた胸筋と腹筋が覗いており、胸の真ん中ほどにミイは右手を当てていた。

「早まるなミイ!」

「私たちが気まずくなってるときに発情するんじゃないわよ。田舎娘！」

2人の焦りも虚しく、帰って来た返事は気の抜けたものであった。

「へ？　スキャンしとっただけばい」

そう言って胸に当てていた右手に握られていたもの、銀色に輝くトランプ大のプレートを見せる。

「心配して損した」

「期待して損した」

胸を撫でおろすアンナと、肩をすくめるエリス。本当なら一言言い返してやりたい気持ちがあったが、それよりも重要な事実を彼女は告げる。

「こん人、魔人族じゃなかばい」

深刻そうに告げる彼女に対しての反応は実にあっけない物であった。

「はぁ。魔人じゃないってのは意外だけど別に種族とかどうでもいいじゃん。アタシら保守派でもないわけだし。それよりさぁ。そもそもこういうのって、賞金首以外、本人の許可なしに調べていいのか？」

「アンナ、今回は仕方ないでしょ。私たちは今の事態の危険度を認

識するべきだわ。ミイは正しい。直接本人に聞こうにも寝てるし。そもそも【主人公補正】だっていつもいい方向だけに作用するとは限らないのよ？　トラブル引っ張って来るってことも自覚しときなさい」

「わかった。悪い人には見えないけど、何かあるのは間違いないもんな。こういうのアタシは苦手だから2人に任せるよ。で、どんな感じなんだ？」

ミイの持っているプレートを受け取って、3人はそれを覗き込む。

「見たほうが早かよ」

「どれ？」

「私にも見せて」

プレートの上には黒い文字で

名前：不明
年齢：２４
種族：不明

と表示されていた。

「うん。見事に『不明』ってしか書いてないな」

「でも魔人族じゃないって証明にもならないわね」

「それより下ばい。問題は」

職業：商人
総合レベル５
ＨＰ：２／１１
ＭＰ：１７／１７
筋力：８
体力：１０
器用：３６
敏捷：８
幸運：４

「総合レベルが低いんだろうけど……器用がおかしいな」

「私の倍どころか、レベル９の狩人のミイ並みって何なのよ？」

「おい。それよりスキルを見ろよ」

常時スキル：【悪運】レベル４

戦闘スキル：短刀　レベル７
　　鈍器　レベル１
　　逃走　レベル１
　　不屈　レベル２

生活スキル：商売　レベル４
　　料理　レベル２１
　　農業　レベル４
　　祈祷　レベル５
　　解体　レベル５

発明　レベル３
鑑定　レベル３

「酷いわね」

「酷かね」

「すげぇ。料理スキルが２１って、そこらの店より上手いよな？」

２人は予想外の事態に顔をしかめるが、逆にアンナは嬉々として話しかける。

「レベル１５超えたらライセンス認定だから、それなりの腕かしら。って、そんなスキルは後回しよ。それよりこれよ！　【悪運】って書いてあるわよ。【不運】の次に不味い、運命改変スキルじゃない」

明らかに青ざめた顔でエリスはツッコミを入れる。だがもっと不味い情報に気が付いたミイが告げる。

「良く見たら状態ステータス欄に、『記憶喪失』ってあるけど『記憶封印』じゃなかごたっね」

「エリス、『記憶封印』じゃなくて『記憶喪失』にする呪文ってあったっけ？」

「ないわ。少なくとも、メジャーな魔法じゃない。それに話していた時は警戒されてほとんど話さなかったけど、記憶がなかったという雰囲気じゃなかったと思うわ」

「あたしもそう思うんだよなぁ。まさかだけど、今日の冥界焼きの刺激が強すぎて記憶も飛んじゃった、とか？」

「「それだ！！！」」

２人は顔を合わせると一呼吸を置いた後、綺麗にハモって叫び、すぐさま遠火に置かれている串焼きにプレートを当てた。

結果は図星。

【暗黒料理】ヨーグリアネズミの冥界焼き
：ＨＰ小回復。耐毒性が低い者に対しＨＰダメージと、稀に記憶障害をもたらす。

「――――私たちのせいだったのね。普段から【暗黒料理】を食べ過ぎて耐毒性がついてるから調べもしなかったもの。迂闊だったわ。」

「そんで、目覚めたらどぎゃんすっと？」

「流石にこの兄ちゃんを放っとくわけにはいかなくなったな」

「記憶障害の程度にもよるけど、目立つし調べられたら私たちも終わるわよね」

このままなら犯罪者コースへ一直線の3人。そしてそれぞれ思い至る。それならいっそのこと彼のことを――――――

「――――雇うか」

「――――攫うか」

「――――匿うか」

第2話　加害者たちの焦想　（後書き）

最初から負い目感じまくりのヒロインたちです。問題ありな3人ですが、彼女たちの本性は少しずつ晒します。ちなみにハーレムにはなりそうにないです。

その他おいしいところは主人公よりも、【主人公補正】持ちのアンナに持って行かれそうです。

時間があれば挿し絵を描きたいですね。オリジナルは初めてということで手探りの状態ですので、いろんな感想待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5735x/

リンゴを求めて

2011年10月19日03時09分発行